「胸に優しきウヰスキーかも」、なるほどなあ、と思った。スキットルボトルは携帯用水筒のこと。ふつうはウイスキー用で平たい金属製。革のケースに包まれたりもしているものもあって、身体になじむように軽くカーブしていたりする。それを胸ポケットに入れる感じだ。省略がきいた表現が、うまい。

おさがりのウールサージの喪の服のつくづく温し母の肩巾　倉石理恵

肩幅がやや広く、ゆったりした感じなのだろう。下句、母親への情感が読めていい。

カーテンの襞にあわせて波を打つ物干し竿を離れた影は　大塚泰子

「物干し竿を離れた影」という見立ての面白さを、うまく一首に生かした。カーテンを開く前の窓に朝日が射している場面と読んだ。

五十年のわが歌の母は逝きたもう如月の空の風しずかなれ　高辻郷子

「五十年のわが歌の母」という表現に深い思いが読める。作者は、二十代になったばかりの頃から、毎月、佐佐木由幾宛に歌稿を送って来られた。

ガリ版刷りの歌会のプリントなつかしき由幾先生の手書きのプリント　伊勢勇

「東京歌会」のことだと思われるが、会場が佐佐木宅の時代か上野文化会館の時代かのどちらだろう。一九六〇年代か七〇年代である。もちろんまだコピー機の無い時代で、すべて手書きだった。この時代の「東京歌会」を知っている人も少なくなった、

足元にひっそり愛犬エリーおき選歌し給いいし机に草の鷺　住正代

結句は、机上にサギソウの鉢がある、の意味だろう。エリーは室内で飼っていたゴールデンリトリバー。ある日の由幾のイメージ。

電話来て通夜・告別に声と顔滲ませて去りぬ伊藤一彦　大野道夫

宮崎から上京して、通夜、葬儀に参加してくれた伊藤一彦。その伊藤一彦をうたって、作者の思いを間接的に表現する。「にじませて去りぬ」が、うまい。

真に生き美を追ひませと説かれたる大正女人麗しきかな　八城スナホ

由幾は大正三年生まれの寅年だった。「大正女人」「麗しき」で、レトロな感じを表現している。

あれからわれもコーヒー紅茶は砂糖ぬき由幾先生の思い出多し　松井千也子

紅茶が好きだったのを思い出した。この作者の母上がご健在な頃からのお付き合いで、由幾は、熱海の作者のお宅にも伺っているはずだ。